

—鈴木商店進出 100 周年—

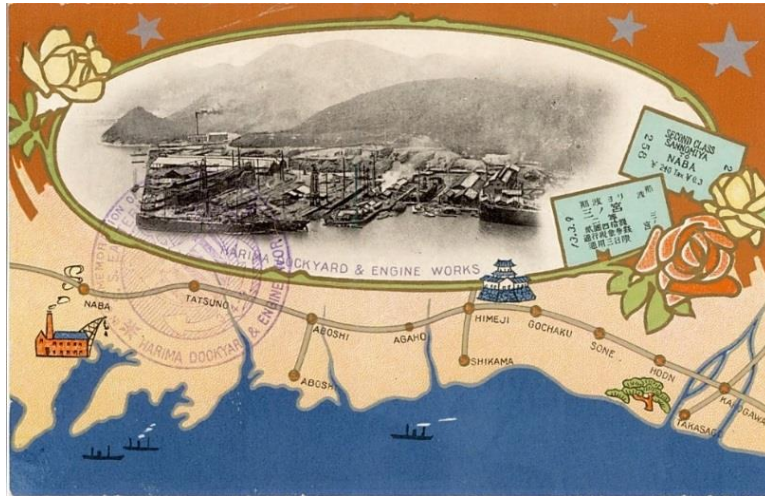
# 播磨造船所と相生の近代化



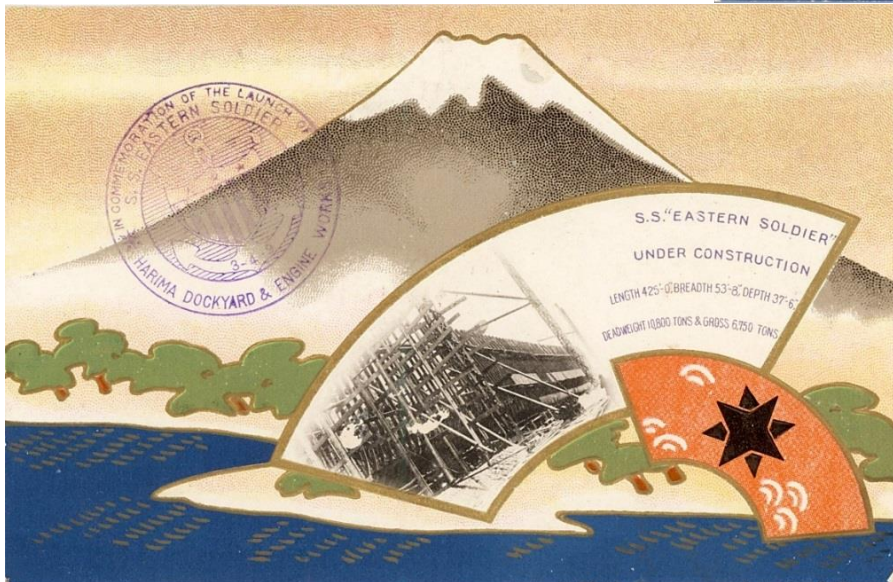
鈴木よね



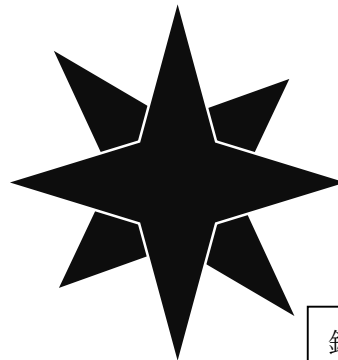
金子直吉



日米船鉄交換船  
イースタンソルジャー  
進水絵葉書



旭商店街大正 13 年(1924 年)ごろ



鈴木商店社章

期 間 平成 28 年 7 月 21 日 (木) ~ 8 月 1 日 (月)

9 : 00 ~ 18 : 00 (※ 7 月 26 日は休館日)

場 所 相生市文化会館 扶桑電通なぎさホール 1 階 ホワイエ

講演会 「日本の高度成長と鈴木商店」

講 師 高畑 新一 (鈴木薄荷株式会社常務取締役)

日 時 平成 28 年 7 月 31 日 (日) 10:00 より

場 所 相生市文化会館 扶桑電通なぎさホール 中ホール ※入場無料

## 展示予定品

- 1 唐端清太郎 (写真、肖像画)
- 2 造船所の発展を写した写真パネルを時系列で展示
- 3 歴史民俗資料館所蔵の播磨造船所平面図等
- 4 イースタンソルジャーの設計図面、進水式絵葉書、船鉄交換同盟関係の資料
- 5 当時の相生市の姿 (写真パネル)

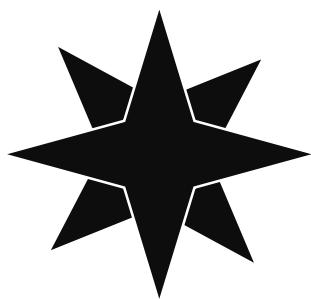
## ◎問い合わせ先

相生市立歴史民俗資料館  
〒678-0053 相生市那波南本町 11-1  
Tel0791(23)2961  
HP:<http://www2.aioi-city-lib.com/bunkazai/siryoukan/>

# 鈴木商店について



鈴木商店社章



鈴木岩治郎

鈴木商店は、明治 7(1874)年に、鈴木岩治郎が大阪の有力な輸入砂糖商・辰巳屋ののれんを譲り受けて、「カネ辰鈴木商店」として神戸・弁天浜に創業。外国産砂糖の輸入商「洋糖引取商」としてスタートした。

辰巳屋・鈴木商店が創業した明治初期の神戸では、居留地貿易の全盛期であった。神戸港は、慶応 3(1868)年に開港され、政府は、日本人商人との貿易は居留地に限定するという「居留地貿易」を義務づけた。鈴木商店の洋糖ビジネスは、居留地の外国商館が輸入した砂糖を日本国内で引取って、日本国内で販売するという取引形態であった。



金子直吉

生年 慶応 2(1866)年 6 月

没年 昭和 19(1944)年 2 月 享年 77 歳

慶応 2(1866)年、伊予との国境に近い土佐・吾川郡名野川村(現在の高知県吾川郡仁淀川町名野川)に生まれた金子直吉は、父甚七が営む呉服反物の商売が振るわなくなり、直吉が 5、6 歳の頃、一家とともに名野川村を引き上げ高知市内に移り住んだ。

高知・乗出(のりだし)での生活は、極貧を極め、家計を助けるため幼くして丁稚奉公に出るようになった。奉公先を転々と変わるうち、農人町の質店・傍士久万次(ほうじくまじ)の下に落ち着く。傍士質店には 6 年ほど勤め、やがて番頭に取り立てられた。この間、質草となった多種多様な書物を読み漁り、また主人が裁判沙汰に巻き込まれると主人のために訴訟に立ち、相手方の著名な弁護士を相手に勝訴するなど直吉の商売の骨格は、この時期に造られたといわれる。

傍士久万次は、やがて質店を廃業して砂糖商に転業、傍士の紹介で明治 19(1886)年、直吉 21 歳の時、神戸の鈴木商店に雇われた。

この時直吉と鈴木商店の仲立ちをしたのは、この地を担当していた鈴木商店の柳田富士松であった。

気性の激しい主人・鈴木岩治郎の厳しいしつけに耐えかねて直吉は、土佐に逃げ帰ってしまうが、よねは呼び戻しの手を差し伸べ、柳田富士松を従え土佐まで迎えに行った。

明治 27(1894)年、直吉 29 歳の時、主人・岩治郎が病に倒れ急逝する。未亡人となったよねを中心とし、柳田富士松、直吉の両番頭による新生鈴木商店がスタートした。



鈴木よね

生年 嘉永 5(1852)年 8 月

没年 昭和 13(1938)年 5 月 享年 85 歳。

姫路市米田町の塗師(仏壇の漆塗り)丹波屋西田仲右衛門の三女として生まれる。よねは、父、仲右衛門の主家で同業の「塗師惣」こと福田惣平の次男に嫁いだが、まもなく離婚してしまう。よねの長兄二代目仲右衛門は、家業を継がず神戸に出て洋銀両替商として既に名を成すまでになっていた。この兄、仲右衛門の縁でよね 26 歳の時、神戸の砂糖商鈴木岩治郎と再婚した。男児 3 人を儲けるが、次男米太郎は 7 歳で病死。

金子直吉が鈴木商店に入店したのは、よねが嫁いってから 9 年後の明治 19(1886)年、直吉 21 歳、よね 35 歳(満 33 歳)の時であった。主人岩治郎は、気性激しく度々、直吉を叱責したばかりか仕事も貸し金の取立てばかりで単調であったため、金子は病気を口実に郷里土佐に戻ってしまった。

よねは、直吉の商才を見抜いており、再三呼び戻しの手紙を送って直吉の再出発を促した。先代、岩治郎は、洋糖引取商として独立し神戸八大貿易商の一つに数えられるまでに発展したが、独立後 20 年ほどの明治 27(1894)年に急逝してしまう。

よねの兄、西田仲右衛門、岩治郎の主家、辰巳屋・松原恒七はじめ親戚筋からは廃業を勧められるも自らが主人となって事業を継続する道を選び、金子直吉と柳田富士松の二人の番頭を全面的に信頼し、新たな船出に乗り出すことになった。

# 播磨造船所について



唐端清太郎

生年 文久 2 (1862) 年 4 月

没年 大正 9 (1920) 年 6 月 享年 58 歳。

飾磨郡谷外村(現姫路市飾東町)で生まれる。志を抱いて上京、青森東奥義塾で法学を学び、青森新報社に入社した。帰郷して兵庫県に就職、明治 18 年赤穂郡役所に転勤し群長を補佐する書記となる。

明治 25 (1892) 年、相生村は唐端清太郎を村長として招へいする。当時の相生村は人口約 5400 人の寒漁村であった。

清太郎は、明治 36 (1903) 年に県会議長に選ばれる。水産業の振興に尽力する傍ら、相生を「西の神戸」にすることをめざし「造船所を創れば船が入り人が集まる」と考えて、明治 40 (1907) 年、播磨船渠株式会社を設立した。

第一次世界大戦が始まると、清太郎は鈴木商店に造船所の買収と拡張を提唱する。清太郎の提唱により大正 5 (1916) 年、鈴木商店が株式会社播磨造船所を設立。鈴木商店の資本と人材によって、播磨造船所は有力造船所に成長、相生の人口は急増し、町の近代化が進んだ。